

リレー随筆

「出会いと決意」

今村総合病院 初期研修医1年 | 塩盛 一晃

はじめまして。今村総合病院 初期研修医1年の塩盛一晃と申します。この度は、直属の先輩である初期研修医2年の安田幸志郎先生よりバトンを受け取り、執筆の機会を頂きましたこと、心より御礼申し上げます。

私は福岡県出身で、もともと鹿児島とはご縁がありませんでした。しかし、妹が鹿児島大学獣医学部に在学していたことから訪れた際、「うなぎの末吉」でいただいたうなぎの美味しさに惹かれたことがきっかけで、この地の医療機関を調べ始めました。そこで出会ったのが今村総合病院であり、病院見学で最初にご挨拶させていただいたのが安田先生でした。患者様へ向ける真摯な姿勢、その言葉に滲む温かさ、さらにはウガンダと日本を繋ぐツアーを企画される行動力——。初めてお会いした日の印象は、今でも変わらず私の指針となっています。そんな先生からバトンを受け取れたことは大きな励みであり、身の引き締まる思いです。

ある患者様とご家族との出会い

研修を続ける中で、心に深く残る患者様との出会いがいくつもありました。その中から、特に私の医師人生に大きな影響を与えた経験の一つ、ご紹介させていただきます。

その患者様は消化管の虚血性病変のため入院され、基礎疾患も多く治療に難渋されました。担当をさせていただいてからしばらくして、重篤な感染症によるショック状態となり、続いて意識の低下が進行しました。そ

れまでは穏やかに会話を交わせる方であったため、変化は急激に感じられました。

意識障害の背景としては、重症感染症に伴う脳機能障害に加え、絶食管理や代謝変動の影響によるビタミン欠乏や、栄養再開時に生じ得る代謝の変化など、いくつかの可能性が考えられました。意識が低下していく中で、ご家族様は毎日のように病室へ足を運ばれ、当初は「何とか助けられないでしょうか」というお気持ちでしたが、次第に「少しでも苦しまずに過ごしてほしい」という願いへと変化していかれました。それぞれの思いの中で葛藤されているご様子を、今でも鮮明に覚えています。

私自身、主治医と相談しながら治療の可能性を模索し続けましたが、意識が回復することはありませんでした。一般に予防可能とされる代謝性の脳障害を十分に意識しきれなかった場面もあり、研修医としての未熟さを痛感するとともに、深い悔しさが残りました。そのような中で私にできたことは、ご家族様へ「そばに寄り添っておられること自体が、患者様にとって何よりの力になっていると思います」とお伝えすることだけでした。

東京での病院見学と、医師としての決意

この経験から間もなく、志望診療科の最前線である東京の病院へ見学に伺いました。以前から「より多くの患者様の力になりたい」という思いは抱いていましたが、この経験は私の背中をさらに押していました。

見学先では、想像を超える先進技術、圧倒的な症例の厚み、そして医師一人ひとりの高い技量を目の当たりにしました。正直に申し上げて、悔しさを覚えました。自分の実力との大きな隔たりを痛感し、それまでの努力の足りなさが胸に突き刺さりました。しかし同時に、「必ずここで働けるようになりたい」「このレベルに到達する」と強く決意するきっかけにもなりました。

WBC 決勝で大谷翔平選手が語った「憧れるのをやめましょう」という言葉があります。私も同じ気持ちです。偉大な医師にただ憧れるのではなく、食らいつき、背中を追い続け、“自分が治せないなら誰にも治せない”と言えるほどの医師を目指していきたいと思っています。

最後に

最後までお読みいただき、誠にありがとうございました。

皆様の中にも、現在それぞれ挑戦していることがあるのではないのでしょうか。今回の見学を通して、私が改めて学んだのは「自分の選択肢を広げる勇気」の重要性です。行動する際、現実的かどうかをまず考えがちですが、ときにはその枠を外して一步踏み出すことで、思いがけず道が開けることがあります。

私自身、最近英語の勉強を始めました。得意ではありませんが、海外留学を目標に、少しずつ取り組んでいるところです。医療に限らず、先生方にもぜひ、ご自身の目標へ向け、新たな一步を踏み出していただければ幸いです。

ご縁がございましたら、今後とも何卒よろしくお願ひ申し上げます。

次号は、鹿児島県立大島病院 / 河野 裕佳先生のご執筆です。
(編集委員会)

